文政十三年おかげ参りに関する考察

――大和国御所町の施行記録に基づいて――

中井陽一

はじめに

「おかげ参り」は、江戸時代に繰り返し起こった伊勢神宮への群参現象である。主なものは、約六十年の周期で起こったとされる慶安三年（一六五〇）、宝永二年（一七〇五）、明和八年（一七七一）、文政十三年（一八三〇）の四回である。慶応三年（一八六七）にも、同様の現象が起こっているが、これは「ええじゃないか」といわれ、別の要因があったとされている。

江戸時代には、伊勢神宮の布教活動に従事した御師の活躍等によって、「一生に一度は、お伊勢参り」という考えが定着し、伊勢参宮が盛んになった。しかし、女性・奉公人等、通常では伊勢参りが出来ない人たちがおり、これらの人たちが、何かのきっかけによって、おかげ参りに参加したとされている。「抜け参り」ともいわれるように、路銀を持たない人が多く、各地で宿泊所・食事等の提供、すなわち施行が行われた。大和国葛上郡御所町（現、奈良県御所市）には、文政十三年のおかげ参りの施行に関し、左記の文書等が残っている。

①「おかげ中　毎日泊名前　施行所」三冊（以下、「毎日泊名前」という）。閏三月四日から九月八日までの宿泊者の組の人数・出身地・代表者の名前等を記載。

②「當施行所江　寄進　名前記」（以下、「寄進帳」）。寄進を受けた金品・数量・寄進者の名前等を記載。跋文に金品以外の寄進、施行が終わった後の行事等を記載。

③「御所町丁毎にありし立山作りもの次第書」（以下、「立山次第書」）。「立山」は、奈良県の方言で飾り物のこと（『日本方言大辞典』[1]）。序文に施行の様子等を記載。

④　太々神楽に関する文書。祝詞・役割等。

⑤　宿泊者のお礼の和歌等。一紙もの九枚。

①から③は、冊子で手製の秩に納められている。その写真を写真1に示す。これらの文書は、施行の世話役の一人で、宿泊の施行が行われた当時の蔵屋敷（現在、この地は太神宮の社となっている）の前に住んでいた玉手屋吉兵衛の子孫である木村吉弘氏の家に伝わったものである。平成十六年七月に発見され、平成十八年四月に、御所市指定文化財となり、現在は御所市で保管されている。

これらの文書に基づいて、宿泊者の動向、宿泊の世話以外の施行、施行のための寄進、施行が終わった後の行事等について報告する。なお、指定文化財になった史料には、「嘉永元年（一八四八）の太神宮の社建設に関する文書」や「施行所の札」が含まれているが、これらに関する考察は、別の機会に行うことにする。

一、当時の記録および先行研究

おかげ参りは、大変大きな出来事であり、書かれたものは沢山あるが、面白可笑しく書かれたり、大げさに書かれたりで、客観的なものは少ないように思える。偶発的に民衆の間で起こったことであり、無理もないことである。また、おかげ参りに関する先行研究は、比較的多いが、最近のものはほとんどない。新しい史料の発見がなく、既存の史料に基づく研究は、出尽くしたという感がある。

文政十三年おかげ参りに関する当時の記録としてこれまで知られているものは、左記の通りである。なお、本報告で引用するものには、略称を記載する。

① 『浮世の有様　巻の二』[2]（以下、『浮世の有様』）
② 『御蔭参雑記』[3]（以下、『雑記』）
③ 『御蔭参宮文政神異記』[4]（以下、『文政神異記』）
④ 『御影正見記』[5]
⑤ 『文政十三寅年伊勢御蔭参実録鏡』[6]
⑥ 『文政十三年庚寅改元天保元年御蔭参り』[7]
⑦ 『御蔭群参地名録』[8]

右記以外に、各地の市町村史等に記載がある。

先行研究には、施行について部分的に触れているものは多いが、まとまったものは、酒井一氏[9]と茨木啓子氏[10]の報告のみであると思われる。酒井氏の報告は、伊勢の万金丹本舗野間商店における施行についてまとめたものである。茨木氏の報告は、奈良県内の施行について、市町村史の記載事項をまとめたものである。

同種の施行の具体的記録として、大和国北八木村における施行の記録『橿原市恵比寿神社保管文書』[11]がある。これは鳥屋源三郎という大商人が主になって施行したものである。また、大坂堂島浜における施行の記録が『浮世の有様』に記載されている。

二、伊勢への街道

文政十三年のおかげ参りは、阿波国徳島から始まったとされている。阿波から御所への経路に関し、『雑記』の閏三月四日条に左記の記述がある。

阿波ヨリ紀州加田と申所へ、追々船にて着。殿様ヨリも施行船、施行駕の出候由。

右記から、阿波から加田（現、和歌山市加太）へ船で来る経路がわかる。また、「大日本行程大絵図」[12]には、阿波国撫養から加田への航路が記載されている。御所へはこの経路が最短であり、阿波の人々は、この経路で御所へ来たもの考えられる。

『大宇陀町史』[13]に掲載されている「天保元年上町おかげ灯籠建立諸入用并寄付記帳」に、左記の記載がある。

当寅弥生の中頃阿波の国より数万人伊勢参宮いたし、おかげ参りと唱へ、（中略）紀伊の国加田浦より和歌山御城下ニ至、又ハ泉州堺浦へ着船、（後略）

堺へ直接船で渡る方法があったことを記述している。また、『文政神異記』には、撫養から淡路島を経由して播州に行く経路が記載されている。阿波から本州へは、これら三つの経路があったことがわかる。加太から御所へは、紀ノ川沿いに橋本・五条を経由する経路が考えられる。これらの経路および伊勢への街道を図1に示す。

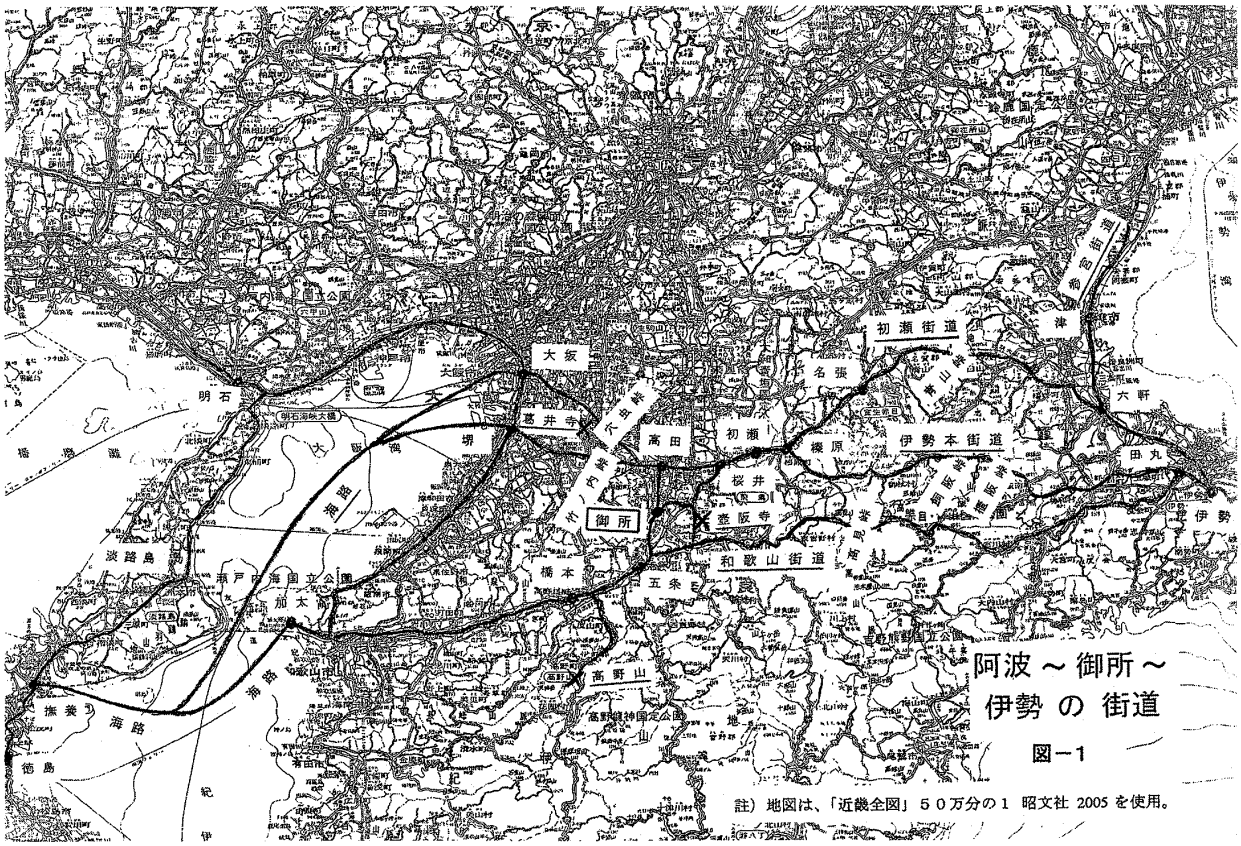
御所から伊勢へは、初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道の三つの街道がある。初瀬街道と伊勢本街道は、榛原で分かれているが、桜井・初瀬を経由して榛原に至る。従って、これらの街道へ出る場合は、まず桜井へ行かなければならない。御所から桜井へは、北へ行き、高田で竹内峠からの道（横大路）に合流する経路、北東に進み八木を経由する経路、東へ行き土佐（現、高市郡高取町）を経由する経路等が考えられる。後述するように、東御所に中飯の摂待所が設けられていることから、八木を経由したのではないかと推測される。

和歌山街道は、五条と御所の間の宇野から、しばらく吉野川沿いに進み、海抜八八六メートルの高見峠を越えて、田丸で伊勢本街道と合流し、伊勢に入る。和歌山街道へ出るためには、宿泊者が最も多い紀伊・阿波の人たちは、引き返さなければならない。また、後で述べるが、この街道の途中の吉野方面の人たちも御所で施行を受けている。この街道の高見峠は、海抜が最も高く、山道が長く、施行を行うところも少ないと思われる。従って、この街道は敬遠されたものと考えられる。

伊勢本街道と初瀬街道とを比べると、初瀬街道は、距離は長いが、道は楽なように思われる。また、山道が少なく、施行を受けるところが多いようである。『文政神異記』に記載の宮川の渡しの上・下の人数の違いを考えても、初瀬街道の方が、より多くの人に利用されたのではないかと考えられる。

御所の宿泊者の中には、御所より東の国の人たちが多数含まれている。これらの人たちは、伊勢参宮のみが目的であれば、御所に来ることはない。伊勢参宮のついでに、西国三十三ヵ所または高野山へ参詣することを考えた人たちではないかと思われる。西国三十三ヵ所第五番河内葛井寺から同第六番大和壺阪寺へは、竹内峠を越えて新庄（現、葛城市）を経由し、御所を通って土佐から行く経路がある。高野街道は、竹内峠の東から葛城山の麓を南進して、風の森峠で五条への道と合流する。この道は、御所町の約一キロメートル西を通っている。

後述するように、和泉・河内・摂津・播磨をはじめ播磨以西の国々の人々が、数多く御所に来ている。これらの方面からは、竹内峠または穴虫峠を越えて、御所に来ることができる。しかし、これらの峠は、横大路を経由して初瀬街道に繋がっているので、直接伊勢に行くことができる。御所は、この街道筋から約七キロメートル南にずれているので、寄り道しなければならない。これらの人たちは施行の噂を聞いて、わざわざ御所に来て施行を受けたのではないかと考えられる。いずれにしても、出発地から伊勢への直線的なルートを辿っただけでは理解しにくいほど多方面から御所に向かい、御所の地で施行を受けていることに留意すべきである。



註）地図は、「近畿全図」５０万分の１ 昭文社 2005 を使用。

三、御所町における施行

文政十三年のおかげ参りにおける御所町の施行については、「毎日泊名前」、「寄進帳」および「立山次第書」に記載されている。「立山次第書」の序文には、左記の記述がある。

参詣之くんじゆう櫛之はを引が如く、泊り〳〵のなんじゆう見るに忍ひず、依而この里の世話人打寄、施行宿を思ひ立、町中隣村の厚志をこひ受、北町には中飯の施行、東にもひるのにぎり喰、会所まえ町にハ泊り宿、毎夜〳〵の参詣宿、百人弐百人の取り持、世話方の骨おりいわんかたなく（後略）

「会所まえ町にハ泊り」と記載されているが、会所前（現、神宮町）には蔵屋敷があり、ここで宿泊の施行が行われたことがわかる。御所は、当時幕府領で、高取藩の預け地となっていた。「御成箇免定」[14]等によると、年貢は、全て銀で納められており、蔵屋敷は、あまり機能しておらず、それが宿泊所に利用されたものと考えられる。また、「北町には中飯の施行、東にもひるのにぎり喰」とある。北町（現、中央通り）は、竹内峠方面からの入口である。御所は、葛城川をはさんで西御所と東御所に分かれているが、右記の「東」は、東御所を差すものと思われる。東御所には、当時、阪口町・代官町・寺内という三つの町があった。伊勢への道筋にあるのは、寺内と阪口町である。寺内は、後述のように寄進の数も少なく、終了後の行事の立山にも参加していないので、阪口町（現、大橋通り一丁目）で施行が行われたものと考えられる。

写真1　秩入り五冊

「毎日泊名前」に記載された人数を集計すると、宿泊者の総数は、九千七百二十九人である。表1には、国別の人数・組数・組平均人数・日数・最初の日・最後の日・ピーク月・ピーク月人数・組最大人数を示す。また、国別・月別の宿泊者を集計したものを表2に示す。国別の集計において、大坂・江戸・堺・京都・小豆島・長崎は、ほとんど国名が書かれていないので、別に集計した。これらの表の他に、各日の宿泊者の人数・天候・太陽暦の月日、大和の宿泊者の出身地、女性グループの宿泊者等の表を作成したが、紙面の関係で割愛する。なお、天候は、大坂町奉行新見正路の日記[15]を利用し、太陽暦の月日は、『日本暦日原典』[16]を参照した。これらの表から左記のことがいえる。

① 大隅・隠岐・壱岐以外の全ての国の人が宿泊しており、伊勢より東の国々も全て含まれている。おかげ参りが、伊勢参詣のみを目的としたものであれば、伊勢より東の国の人が御所に来ることはないはずである。

② 始まりは閏三月四日であるが、この日に紀伊：五人、阿波：二人、丹波：六人、播磨：二人が宿泊している。丹波・播磨が施行の初日に宿泊していることに注目しなければならない。

③ 宿泊者の多い国は、紀伊：四千八十一人、阿波：九百二十七人、大和：四百四十七人、越後：三百四十三人、播磨：二百五十九人、石見：二百三十四人で、紀伊が全体の四十一・九パーセントである。

④ 人数の多い順の六番目は、石見であるが、出雲：百三十人（十四番目）、伯耆：八十九人（二十番目）であり、山陰地方が比較的多い。これらの国のピーク月は遅いが、初出は早いようである。

⑤ 閏三月九日までに宿泊した、五畿内・紀伊・四国以外の国の初出は、五日：尾張、六日：長門・豊後・越前（一人）、七日：越中・

	国	人数	組数	組平均人数	日数	最初の日	最後の日	ピーク月	ピーク月人数	組最大人数
38	肥　後	37	11	3.36	11	3月27日	8月21日	6月	20	9
39	備　後	36	13	2.77	10	4月3日	8月18日	5月	14	9
40	因　幡	34	9	3.78	9	3月12日	8月17日	8月	19	7
41	出　羽	33	18	1.83	16	3月8日	8月22日	5月	23	7
42	佐　渡	32	6	5.33	5	3月7日	8月5日	5月	15	15
43	駿　河	30	14	2.14	12	3月12日	9月6日	8月	10	8
44	筑　前	30	9	3.33	9	5月13日	9月1日	8月	21	9
45	山　城	26	12	2.17	12	3月14日	7月22日	3月	11	6
46	若　狭	26	8	3.25	8	4月4日	9月5日	5月	14	14
47	越　中	25	7	3.57	7	3月7日	6月10日	5月	9	6
48	武　蔵	23	16	1.44	16	4月8日	9月4日	8月	6	2
49	美　作	21	10	2.10	10	3月19日	9月8日	8月	8	8
50	甲　斐	20	11	1.82	11	3月12日	9月2日	5月	11	3
51	三　河	18	9	2.00	8	3月9日	8月29日	5月	7	5
52	上　総	16	5	3.20	4	4月22日	6月22日	6月	10	9
53	上　野	16	9	1.78	8	5月7日	9月2日	6月	7	2
54	飛　騨	15	11	1.36	10	4月29日	9月4日	5月	5	2
55	日　向	15	2	7.50	2	4月25日	6月13日	6月	14	14
56	伊　豆	12	5	2.40	5	3月12日	9月4日	6月	6	6
57	豊　前	12	6	2.00	6	4月8日	7月8日	4月	5	4
58	下　野	11	9	1.22	8	4月26日	8月12日	6月	4	2
59	小豆島	10	2	8.00	2	3月26日	4月11日	3月	8	8
60	伊　賀	9	4	2.25	4	5月2日	8月11日	6月	5	5
61	下　総	9	6	1.50	6	4月8日	8月26日	4月	5	4
62	志　摩	8	4	2.00	4	3月21日	7月8日	5月	4	4
63	能　登	8	4	2.00	4	5月6日	8月18日	5月	3	3
64	常　陸	7	3	2.33	3	4月23日	7月7日	4月	4	4
65	筑　後	4	2	2.00	2	5月14日	6月1日	5月	2	2
66	長　崎	4	3	1.50	3	4月23日	7月8日	5月	2	2
67	土　佐	3	2	1.50	2	5月1日	6月21日	6月	2	2
68	相　模	2	1	2.00	1	9月6日		9月	2	2
69	薩　摩	2	1	2.00	1	7月19日		7月	2	2
70	安　房	1	1	1.00	1	8月29日		8月	1	1
71	対　馬	1	1	1.00	1	8月25日		8月	1	1
72	不　明	17	7							
	合　計	9,729	2,919	3.33	181	3月4日	9月8日	3月	2,966	77

注）3月は、全て閏3月である。

表1　国別　宿泊者

	国	人数	組数	組平均人数	日数	最初の日	最後の日	ピーク月	ピーク月人数	組最大人数
1	紀　伊	4,073	1,096	3.72	155	3月4日	9月6日	3月	1,580	22
2	阿　波	887	208	4.26	108	3月4日	9月6日	3月	417	77
3	大　和	449	151	2.97	88	3月6日	9月6日	4月	183	17
4	越　後	355	73	4.86	52	3月8日	9月8日	5月	145	30
5	播　磨	256	84	3.05	57	3月4日	9月3日	3月	135	13
6	石　見	234	41	5.71	30	3月13日	8月18日	6月	87	22
7	和　泉	206	79	2.61	60	3月7日	9月4日	5月	67	9
8	伊　予	206	65	3.17	47	3月11日	9月1日	6月	75	11
9	讃　岐	198	64	3.09	55	3月8日	9月6日	3月	48	16
10	河　内	151	63	2.40	46	3月9日	9月6日	5月	49	8
11	遠　江	135	47	2.87	38	3月9日	9月4日	3月	26	21
12	大　坂	134	63	2.13	48	3月5日	8月27日	5月	43	14
13	豊　後	131	36	3.64	33	3月6日	9月1日	5月	57	9
14	出　雲	130	19	6.84	17	3月8日	9月4日	6月	68	40
15	江　戸	116	69	1.68	49	4月22日	9月8日	6月	42	5
16	周　坊	114	27	4.22	23	3月9日	8月12日	6月	38	24
17	摂　津	99	43	2.30	37	3月12日	8月26日	3月	31	11
18	尾　張	91	48	1.90	42	3月5日	9月8日	4月	24	6
19	丹　波	89	21	4.24	19	3月22日	7月20日	3月	49	10
20	伯　耆	89	18	4.94	18	4月12日	9月5日	4月	40	20
21	長　門	85	22	3.86	21	3月6日	9月2日	4月	29	17
22	備　中	83	24	3.46	21	3月12日	8月12日	4月	31	18
23	越　前	82	28	2.93	22	3月6日	9月4日	6月	43	27
24	安　芸	81	29	2.79	25	3月8日	9月8日	4月	28	12
25	淡　路	73	15	4.87	13	3月12日	6月22日	3月	46	5
26	加　賀	68	26	2.62	24	3月20日	8月12日	6月	30	6
27	備　前	59	26	2.27	22	3月11日	8月4日	3月	16	6
28	美　濃	58	27	2.15	26	3月12日	9月6日	6月	15	5
29	伊　勢	57	19	3.00	18	3月8日	9月6日	4月	16	7
30	但　馬	53	17	3.12	14	3月16日	8月26日	7月	29	8
31	丹　後	52	12	4.33	12	3月21日	8月18日	6月	15	9
32	信　濃	50	26	1.92	21	3月11日	9月6日	7月	16	6
33	肥　前	47	15	3.13	15	3月19日	9月8日	3月	14	8
34	近　江	46	20	2.30	19	3月8日	8月6日	6月	20	11
35	堺	42	13	3.23	13	3月15日	8月24日	4月	14	7
36	陸　奥	40	22	1.82	18	3月19日	8月18日	6月	8	6
37	京　都	37	22	1.68	21	3月15日	8月29日	6月	12	5

	国	閏3月人数	4月人数	5月人数	6月人数	7月人数	8月人数	9月人数	計人数
37	京　都	1	11	2	12	3	8		37
38	肥　後	10			5	20	2		37
39	備　後		11	14		6	5		36
40	因　幡	3		5	4	3	19		34
41	出　羽	1	5	23		3	1		33
42	佐　渡	10		15	6		1		32
43	駿　河	3	6		5	1	10	5	30
44	筑　前			3	2		21	4	30
45	山　城	11	2	3	8	2			26
46	若　狭		4	5	14		1	2	26
47	越　中	6	8	9	2				25
48	武　蔵		4	2	5	3	6	3	23
49	美　作	3	1	5	2		8	2	21
50	甲　斐	1	4	11	2	1		1	20
51	三　河	1	1	7	5	1	3		18
52	上　総		1	5	10				16
53	上　野			2	7	2	3	2	16
54	飛　騨		2	5	2	4	1	1	15
55	日　向		1		14				15
56	伊　豆	2	1		6		2	1	12
57	豊　前		5	4	2	1			12
58	下　野		1	1	4	4	1		11
59	小豆島	8	2						10
60	伊　賀			3	5		1		9
61	下　総	1	5	1			2		9
62	志　摩	1	2	4		1			8
63	能　登			3	2		3		8
64	常　陸		4		1	2			7
65	筑　後			2	2				4
66	長　崎		1	2		1			4
67	土　佐			1	2				3
68	相　模							2	2
69	薩　摩					2			2
70	安　房						1		1
71	対　馬						1		1
72	不　明		5	5	3	2	1	1	17
	合　計	2,966	2,451	1,722	1,227	587	624	152	9,729

表2　月別・国別　宿泊者

	国	閏3月人数	4月人数	5月人数	6月人数	7月人数	8月人数	9月人数	計人数
1	紀　伊	1,580	1,503	510	204	98	149	29	4,073
2	阿　波	417	132	214	41	24	43	16	887
3	大　和	159	183	56	16	7	22	6	449
4	越　後	17	26	145	111	44	10	2	355
5	播　磨	135	46	24	11	25	14	1	256
6	石　見	35	9	59	87	42	2		234
7	和　泉	45	31	67	27	17	17	2	206
8	伊　予	11		68	75	31	20	1	206
9	讃　岐	48	34	24	36	30	14	12	198
10	河　内	40	17	49	31	6	4	4	151
11	遠　江	26	6	12	40	8	41	2	135
12	大　坂	25	29	43	17	12	8		134
13	豊　後	18	29	57	16	2	8	1	131
14	出　雲	26		12	68	5	16	3	130
15	江　戸		5	13	42	34	19	3	116
16	周　坊	18	25	14	38	16	3		114
17	摂　津	31	36	10	7	7	8		99
18	尾　張	24	17	20	4	9	14	3	91
19	丹　波	49	16	2	4	1	17		89
20	伯　耆		40	12	9	3	10	15	89
21	長　門	28	29	5	10	2	5	6	85
22	備　中	17	31	20	8	3	4		83
23	越　前	10	2	9	43	3	13	2	82
24	安　芸	16	28	7	17	8	2	3	81
25	淡　路	46		18	9				73
26	加　賀	6	7	9	30	7	9		68
27	備　前	16	14	17	7		5		59
28	美　濃	2	2	15	15	8	8	8	58
29	伊　勢	10	16	10	11	4		6	57
30	但　馬	2	18			29	4		53
31	丹　後	11	6	14	15	3	3		52
32	信　濃	2	3	12	8	16	8	1	50
33	肥　前	14	1	13	6	3	8	2	47
34	近　江	7	6	2	20	6	5		46
35	堺	9	14	13	4		2		42
36	陸　奥	4	3	5	8	12	8		40

佐渡、八日：出雲・伊勢・出羽（一人）・安芸・近江、九日：遠江・三河（一人）・周防、である。六日に五人の豊後のグループ、ならびに八日に出雲の八人の女性グループおよび一人ではあるが、出羽の人が宿泊していることも注目する必要があると思う。

⑥　組の最大の人数は、五月十五日に宿泊した阿波の七十七人グループである。このような大勢のグループがどのように形成されたかについては興味がある。出発時点から大人数とすると、制約を排除して村を出ることが困難であると考えられ、また、体力・所持金等の差を考えるとグループを維持することも困難であると思う。少人数のグループが旅の途中で、離合集散していたのではないかと推察される。

⑦　組平均人数をみると、全部の平均は、三・三三人であるが、江戸が一・六八人、京都も一・六八人、大坂が二・一二人と大きな町が少ない。これは、町の人は一人で旅することが多かったためである。

⑧　江戸は百十六人と比較的人数が多いが、初出が四月二十二日と遅い。これは、江戸に伝わった時期が遅く、また人口が多かったためと考えられる。

⑨　一日の宿泊者の人数の最大は、閏三月十九日の百九十五人である。

⑩　新見の日記によると、五月七日は終日強雨で、雨の日が二日続いている。五月七日は、太陽暦の六月二十七日であり、台風の影響が考えられる。これら雨の日でも人は入れ替わっている。

⑪　七月十四日から十六日のお盆の期間は、施行宿を休んでいる。この間、旅行中の人たちは、食事・宿泊をどうしたかが問題である。

⑫　大和の宿泊者では、紀伊からの途中の宇智郡の人が多い。また、葛上郡でも紀伊方面の村の人が多い。このことは、阿波・和歌山からの人たちに合流して参宮した人が多かったためと思われる。

⑬　吉野郡は和歌山街道沿いにある。この地方の人が御所へ来るのは、伊勢への逆になる。このことからおかげ参りでは、和歌山街道はあまり利用されなかったことがわかる。

⑭　葛上郡の宿泊者は、何れも御所の近くで、徒歩三十分から二時間の範囲である。『浮世の有様』にあるように「口すぎに施行受け歩行て、処々の施行宿に泊まりぬるが」というように施行を受けることが目的であった、午後遅くに思い立って出発した、参宮者ではなく寄進を持ってきて帰れなくなった等の理由が考えられる。

「寄進帳」の跋文に、左記の記述がある。

閏三月四ヨリ六月十日迄　風呂之施行

一　壱万九百拾八人　下駄屋清兵衛、大工清左衛門、上せん屋宗兵衛、常門屋善兵衛、ふろ屋四軒ニ而右之人数毎夜施行ふろニ入申候。併四軒とハ乍申、大工せい・下駄清ニ而入申候。尤右ふろ之義余り永く之事故、夫々ふろ屋職ニ候間、いつ迄も無銭ニ而ハ甚た気之毒と及候故、六月十日より施行所ニ而箱ふろ仕、右参詣人壱々施行所に而湯ニ入申候。

右記により、風呂屋四軒によって、六月十日までに一万九百十八人に対して風呂の施行をした事がわかる。六月十日までの宿泊者は、七千五百七十九人である。四軒の風呂屋で施行を行っており、人数の集計が正しいとはいえないが、約三千三百人は、宿泊せず風呂の施行の

みを受けたことになる。各地の市町村史に施行をしたという記載は多くあるが、風呂の施行を行ったという記載はない。この風呂の施行が、多くの人を御所に呼んだ要因とも考えられる。なお、六月十日以降は、施行所で湯に入れたと記載されている。

「毎日泊名前」の閏三月二十六日条に左記の記述がある。

一　三人　阿州　妙通郡（名西郡）桜間村　お松女

右親子三人之内母親病気取合、剰乳呑子壱人有之候、病気中町方ニ而乳貰ひ養育セ話致遣り、其細町役人ヨリ大坂阿波蔵敷（ママ）代官所へ及引合、蔵屋敷より、右病人夫栄蔵呼ニ被遣候処、同四月八日ニ當受仕暫ノ間介抱致居候得共無其儀、依て同四月十六日に右親子四人共駕ニ而大坂へ返し渡し申候　以上

この記述から、乳飲み子を含む母子三人で参宮しようとしていることがわかる。この日には、同じ村の宿泊者はなく、この三人の単独の旅である。閏三月二十六日に発病し、四月八日には阿波から夫が来ている。このことから、御所の町役人から大坂蔵屋敷→阿波藩→桜間村という連絡が、比較的短期間にできていることがわかる。「毎日泊名前」は、日付順に記載されている。この出来事は閏三月二十六日から四月十六日までのことであるが二十六日の冒頭にまとめて書かれている。このことから、これらの帳面は、後で清書されたことがはっきりとわかる。

その他、「寄進帳」跋文には、「施行宿初り候ヨリ終り迄参詣之人数へ毎朝立候節、壱銭弐銭つゝ持せ候」とあり、「立山次第書」序文には、「暮れは蚊のふせぎ、くつさみすれハ薬の施行、医の御見舞」等の記述がある。このような施行も行っていたことがわかる。

施行を受けた人たちが歌等を残している。これらは、糊付けしたと思われる跡があることから、施行所に貼られていたと考えられる。それらの写真を写真2に示す。その一部は、左記の通りである。出身地が記載されている②と⑥は、「毎日泊名前」に宿泊者として記載されている。その記録から、②は、紀伊曽屋村（現、那賀郡岩出町）の八十八歳の人が一人で旅をしていたことがわかる。また、⑥から、西国三十三ヵ所巡礼の途中に立ち寄ったことがわかる。何れも達筆で、書き手はある程度の教養のある人と思われる。

① 御蔭とて　施行の宿の　御世話方　神慮に叶い　子孫繁昌
草も木も　なびかぬ国ハ　なかりけり　天照します　神の御蔭に
尻かるに　御蔭でぬけ□　参宮人　腰がかるいか　足のかる□
（下部欠落）

② 八十八才　三月堂古柳　行くれて　御所の施行て　ひとやとり
すみよりたかき　恩をわすれぬ

③ 御世話人衆中江　かしわでの　音もきこへし施行宿
せわのきどくに　神もまんぞく

④ 萬客に　施行の徳の　めぐみにて　御所をたいしに　神や守らん
遠州浜宿　閑梁

⑤ たすかりに来る　たすけてやろう　神こゝろ　御所のたのしみ
此世にもかな

⑥ 丹後竹野郡和田野村　文政十三年　奉納西国三拾三所順礼
同行十七人　寅八月六日　助蔵

写真2　礼の歌等

四、御所町の施行に対する寄進

おかげ参りへの施行に対し、町の内外から寄進があった。寄進を受けた金品の内訳を表3に示す。御所町内からの寄進と近隣の村々からのものに分けて集計した。品名のみで数量の記載がなく、集計ができないものは、件数の集計のみとしている。件数に関し、一人で同時に複数の品物を寄進した場合は、その品物の数、一つの品物を複数人で寄進した場合は、一件としている。件数は、御所町内六百七十件、近隣の村五百二十二件、他国二件で、計千百九十四件である。しかし、一人で複数回の寄進している人がある一方、村中や町中でまとめた寄進があり、寄進した人の数と件数とは一致しない。寄進した人の数は、この件数より多いものと思われる。

表3では、項目を「金・銀・銭」、「穀類」、「嗜好品」等に分け、それらの項目の品目毎に集計した。計算が可能なものについては、一件当たりの平均の数量を記載したが、前述のように、数量については大きな幅があり、目安程度にしかならないと思う。これらに関し、項目毎に特徴・問題点・疑問点等について述べる。

① 銀・札・銭について、銀・札は六十匁を一両とし、銭は四千文を一両として、金に換算して集計した。銀・札・銭と金・南陵とを合わせると、合計五両三分三朱になる。札は銀に比べ、価値が少し低いように思われるが、データがないので銀と同じとした。

② 米・白米の寄進は二十二石強で、宿泊者の数は九千七百二十九人である。宿泊者の食事のみであれば十分であるが、昼に通行者に握

り飯を施行したとすれば、不足するように思える。奈良市近辺の施行に関し、『井上町中年代記』[17]には、「米ハ旅人より受取、たき申候。味噌汁又ハおかずハ夫々つけ申候」とあり、宿泊者からもらった可能性がある。また、麦の寄進が少なく、当時麦飯が一般的とする説には、疑問がある。

③ 「まこの粉」は、『全国方言辞典』[18]によると、奈良地方の方言で、小麦粉となっている。どのようにして食べたかはわからない。

④ 酒の寄進が合計一石八斗七升ある。これらの他に「御神酒」として量が記載されていないものがある。『新庄町史』[19]に「酒の施行した」と書かれているので、宿泊者に饗したものと考えられる。

⑤ 薪・柴・枝については、近隣からの寄進が圧倒的に多く、山に近い村からの寄進である。割木については、九百四十件目前後に、町役人等からのまとまった寄進がある。「寄進帳」跋文に、六月十日以降、風呂の施行を施行所で行うことになったと記載されている。このため、割木の寄進を依頼したのではないかと思われる。

⑥ 醤油の寄進は多く、量の分かるものの合計は一石九斗である。現在の醤油の消費量を考えると、消費しきれないような量である。醤油の量が多いのは、萩之本村（現、橿原市一町）から一石の寄進があったことが一つの要因である。しかし、この寄進は三百九十六件目であるが、その後、御所町から五斗五升の寄進を受けている。常識的には、十分な量の醤油があれば、他の品物に替えるように依頼するものと考えられるが、そのようにしていない。現在と醤油の使い方が違っていて大量に必要であった、換金した等の可能性が考えられる。

⑦ 味噌の量として、「少し」・「少々」・「大重」の記載がある。これらを見ると味噌の寄進は少なかったものと思われる。前述の奈良の施行ではみそ汁を提供しており、食事に味噌汁を付けるのは一般的であったと思われる。味噌は各家庭で自家消費分のみを造っていて、余裕がなかったという可能性がある。

⑧ 砂糖の寄進は二件で、計一斤半である。当時砂糖は貴重であったということを実証しているように思われる。

⑨ 四月三日の夕食を東本町（御所町内）が寄進しているが、この日の宿泊者は、百十七人である。また、この寄進は、全部で千百九十四件の寄進の中の八百六十九件目である。この日は施行開始後約一ヶ月であり、一ヶ月の間に七十パーセント以上の寄進があったことがわかる。六日の夕食とあるが、これは二百六十七件目で、四月三日より前であるから閏三月である。施行開始後三日間で、これだけの件数の寄進があったことがわかる。

⑩ 「くき」は、『全国方言辞典』[18]によると、「大根を葉茎共に塩漬けしたもの」となっている。くきの寄進は、野菜の寄進がある前の初期に集中しており、冬の間の野菜の保存食であったものと考えられる。

⑪ 干し大根・割干し・切り干しは、近隣の村からの寄進がほとんどである。一方、とうふ・あげ・こんにゃくは、全て町内からの寄進である。町と村との食文化の違いがわかる。

⑫ 野菜には、季節感があって面白く、時期によって同じ野菜が集中している。なすびは、個数が記載されているが、合計二千五百六十三個である。なお、一荷は五十個とし、数値の記載のないものは無

		御　所　町			近隣の村・他国			計			備　　考
野菜等	単位	数量	件数	1件当り	数量	件数	1件当り	数量	件数	1件当り	
菜			2			5			7		
ちしゃ			17			25			42		
三月な			7			9			16		
若な			5			6			11		
青菜			0			6			6		
その他菜類			4			3			7		からしな、みつば、嫁な
田いも			5			12			17		
いも			3			5			8		
なすび	個	17,622	108	18.8	2,455	66	37.2	2,643	76	34.8	1荷を50個、数値の無いのは無視
きゅうり	本	239	4	59.8		5			9		
白うり	本	11	2	5.5		2			4		
なんきん			0		15	15			15		
牛蒡			4			1			5		
大根			5			6			11		
にんじん			1			1			2		
ふき			8			20			28		
わらび			3			0			3		
ぜんまい			1			0			1		
たけのこ			5		15	1			6		
みょうが			0			1			1		
十八			1			3			4		
豆	荷	1.5	3			3			6		
黒大豆			0			2			2		
小豆			7			0			7		
空豆	合		0		200	2			2		
ごま	合	17	3			1			4		
魚類											
うるめ		700	1			0		700	1		700入1俵
かます		12	2			0		12	2		
大たこ	はい	1	1			0		1	1		
ざこ	升	3	1			0		3	1		
鮎	尾	32	1			0		32	1		
薬等											
和中散	服	1,050	3			0		1,050	3		1人で500服2回
薬	服	100	1			0		100	1		中村龍品より
施薬	服	155	2			0		155	2		中村龍品より
食器等											
茶わん	客	10	1	10.0	85	6	14.2	95	7	13.6	
小さら	枚	20	1	20.0	200	1	200.0	220	2	110.0	
ぬりかわらけ	枚	100	2			0					
箸	膳	700	2			0					
御膳			1			0			1		
履き物等											
わらじ	足	645	11	58.6	85	6	14.2	730	17	42.9	
杖	本	15	1	15.0	200	1	200.0	215	2	107.5	
下駄	足	25	2	12.5		0		25	2	12.5	

その他
竹、のぼり、注連縄、墨、白木綿、釣り鐘、鳥かご、板、びん付け、丁ちん、その他不明　10件　　**件数合計　1,194**

表3　寄進された金品の集計

		御所町			近隣の村・他国			計			備考			
金・銀・銭	単位	数量	件数	1件当り	数量	件数	1件当り	数量	件数	1件当り		両	分	朱
銀	分	948	108	8.8	96	8	12.0	1,044	116	9.0	金換算（60匁：1両）	1	3	
札	分	310	24	12.9	520	9	57.8	830	33	25.2	同上	1	1	2
銭	文	5,015	55	91.2	1,597	18	88.7	6,612	73	90.6	同（4,000文：1両）	1	2	2
金	朱	4	2	2.0	9	6	1.5	13	8	1.6	100疋：1分		3	1
南陵	片	1	1		2	2	1.0	3	3	1.0	1片：2朱		1	2
計												5	3	3
穀類														
米	合	17,622	102	172.8	4,020	69	58.3	21,642	171	126.6				
白米	合	650	3	216.7	60	2		710	5	217	米・白米合計　22石2斗9升2合			
麦	合	10	1		183	7	26.1	193	8	24.1				
餅米	合	100	3	33.3		0		100	3	33.3				
餅			10			1			11		こむぎ餅、おかがみ含む			
まこの粉			5			0			5		まこの粉は小麦粉			
はったい粉他			2						2		他は豆の粉			
嗜好品														
酒	合	1,590	49	32.4	280	5	56.0	1,870	54	34.6				
焼酎	合	150	5	30.0		0		150	5	30.0				
茶			7			10			17					
燃料・照明														
割木	駄	27	19		26	28		53	47		荷・束・貫目は集計から除外、			
薪		11束	3		7駄2荷	9			12		近隣＋13束			
柴		16束	6		6駄6荷	14			20		近隣＋6束			
枝			0		10駄9荷	22			22		近隣の束・本は集計から除外			
油		30	3	10.0		0		30	3	10.0	他、米屋嘉兵衛による寄進			
ろうそく			6			0			6					
その他	とうしん、火打ち、石				豆がら									
調味料														
醤油	合	550	6	91.7	1,350	5	270.0	1,900	11	172.7	萩之本村から1件1石の寄進			
味噌			4			3			7					
砂糖	斤	1.5	2	0.8				1.5	2	0.8				
塩	俵	1	1					1	1					
加工食品等														
くき			26			42			68		大根等の塩漬け			
漬けもの			26			32			58					
こんにゃく	丁	103	7	14.7		0		103	7	14.7				
とうふ・焼とうふ	丁	224	5	44.8		0		224	5	44.8				
あげ		10	1			0		10	1					
干し大根他			1			19			20		割干し、切り干し			
そうめん	把	30	1			0		30	1					
こんぶ			2			0			2					
煮しめ			5			1			6					
さしみ・すし			2			0			2		各1件、同一人			
6日夕食	食	97	1			0		97	1		267件目、故に閏3月			
4月3日夕食	食	119	1			0		119	1		1,194件中869件目			

視した。一つの村から十件程度のまとまった寄進があり、数は、六・七個から最高三百個というバラツキがある。村で集めて持ってきたのではないかと思われる。

⑬「わらじ」は七百三十足で、九千七百二十九人の宿泊者に対しては不十分である。初期は、数量が少なく、中期以降に世話人等がまとめて寄進をしている。

これらの寄進をみると、品物の種類が多く、量もまちまちで、各自が手近なものを分相応に寄進したことがわかる。このことは、施行が広く住民に支持されていたということであり、おかげ参りに対する参加意識の表れであると思われる。寄進されたものをどのようにして、参宮者に供されたか、金銭がどのように遣われたのか等、疑問が多いが、明らかにする方法がない。また、食習慣の違いについてもわからないことが多い。

御所町内からの寄進で、名前が記載されているものの件数は、六百五十三件であるが、一人で複数回の寄進をしている人があるので、人数は四百三十三人である。一人平均一・五回の寄進をしたことになる。組としての寄進は、三軒で米五斗五升というように大きな寄進がある一方、五軒で米三升のような裏店の人の寄進がある。

寺内と書かれた寄進は、三件・二人しかない。記入漏れや申告漏れがある可能性があるが、後述するように、終わった後の行事に、寺内の人が参加していないことからも、寺内は関与しなかったように思える。

文政十三年に近い年の宗門改帳は現存していないが、現存している最も近い年の天保七年（一八三六）の「宗門改帳」[20]によると、御所町の軒数は、六百七十五軒で、寺内の中心寺院である円照寺の檀家は、百三十四軒である。寺内に円照寺以外の寺院の檀家がいるはずであり、また、寺内の外に円照寺の檀家がいることも確かである。しかし、それらがほぼ等しいと仮定して、全軒数から円照寺の檀家の数を引くと五百四十一軒となる。この数を寄進した人数の四百三十三人との割合を求めると約八十パーセントとなる。この計算には、町としての寄進や匿名の寄進等が考慮されていない。それらを考慮すると、寺内を除く御所の住人の約九十パーセントが寄進に参加したものと考えられる。

寄進した村は、葛上郡三十四ヵ村（文化十四年（一八一七）村名寄高付帳[21]によると総村数六十四）、忍海郡九ヵ村（同二十）、葛下郡一ヵ村、高市郡五ヵ村、吉野郡二ヵ村である。寄進した村の数は多いが、一・二件と件数の少ない村、件数の多い村、村として村役人等がまとめた村の三つのタイプに分けることができる。これは、村への情報の伝わり方、伝わった後の村人の対応等によるものと考えられる。また、村高と寄進の多い少ないとは、ほとんど関係がないようである。

他国の人の寄進として、「金百疋　讃州高松御領分河野郡北之庄村喜代蔵」・「南鐐　壱片　濃州武儀郡上在地　酒井光庵」の二件ある。喜代蔵の寄進は八百五十八件目で、夕食の寄進があった四月三日のすぐ前である。宿泊者の名前を調べたが見付からなかった。この人は、寄進のみであったと思われる。

「寄進帳」の跋文には、西口屋弥吉郎・和泉屋善三郎・平野屋和助・玉手屋吉兵衛・はね屋利兵衛・今井屋安兵衛・中村龍品・今井屋七兵衛の八人が、世話人の代表として参宮したことが記載されている。

これらの人たちは、「施行所の札」には会所前となっている。同じく跋文に、毎日太神宮に灯明をあげたという記述がある。この太神宮は、施行所に祀られていた伊勢講のお祓いであったと考えられる。このこと等から、会所前の伊勢講の人たちが自主的に施行を始めたものと推測される。

五、施行終了後の行事

九月八日で施行が終了した後、九月二十六日に太々神楽が宿泊場所となっていた蔵屋敷で行われ、町々には立山が作られるとともに、餅をついて寄進を受けた村々や町民に配ったことが、「立山次第書」や太々神楽関係の文書からわかる。「立山次第書」の序文には、左記のように記述されている。

（前略）菊月下の六日、施行宿ニハ代々神楽、町々ニハ思ひ思ひの作りものやら立山やら、古今稀なる賑ハしさ、二里三里の山家より見物くんしゆうおびたゝし（後略）

「古今稀なる賑ハしさ・・」とあり、近隣の村々から大勢の見物人が来たことがわかる。

本田安次氏は、著作集『日本の伝統芸能　第七巻　神楽』[22]の中で、内宮の禰宜薗田守良神主（一七八五～一八四一）の著を引用して次のように記している。

今の世に、大々神楽、大神楽、神楽という三種あり。（中略）さる故に神楽と云は、たゝ鼓吹のみ一段あり、大神楽と云ふは、鼓吹六段、大々神楽とは、歌十二段、鼓吹俳優の態、女舞の状もありて、石屋戸の故事をひがみ勤むるなり。

また、同書の別の項には、伊勢神楽について左記の記述がある。

この神楽というのは、古くより外宮の御師によってとり行われてきたもので、願主の申し出により、その役宅を清め、神殿に神座を設けて、これに両宮を勧請申し、御師の下にあった神楽役人達が大勢参集して行ったものである。

右記によると、太々神楽は、かなり大規模なものであることがわかる。しかし、「太々神楽次第書」によると、この時の太々神楽は、神主を含む神職三人と二人の巫女および「神子中」と書かれた氏子によって行われ、大規模なものではない。太々神楽は、伊勢神宮の御師の家で行われたことから、規模に関係なく、伊勢神宮に関係する神楽は、太々神楽と呼ばれたのではないかと思われる。

祝詞の中に左記のように、犬や鶏について書かれている。

犬ハ貴幣を耳つらに戴き、鶏はゆふしてをかけ尾に付て、太神宮に詣ふて奉れハ

『文政神異記』には、「阿波の國徳島のおさんという犬が、頸に銭と金子とをくゝりつけて伊勢神宮にきて、古市町大和屋長兵衛の世話で無事に帰国した」ということが書かれている。また、『御蔭群参図』[23]に犬がお祓を附けている絵がある。

鶏に関しては、『文政神異記』に二つの逸話が記載されている。その一つは、「丹波國某郡某村某家へ鶏二羽が御祓をくわえて飛んで来たので、主人がこの鶏を連れて外宮御広前へ来たところ、山城國の参詣人が自分のところで飼っていた鶏だというので、山城國の人の名前で奉納した」という話である。もう一つは、「大和國某村の或人が寵

愛していた鶏がいなくなり、十日ほど過ぎて御祓を持って帰った」というものである。

これらの逸話は、おかげ参りの期間中に創られたものと考えられ、それらが、参宮者から参宮者へと伝わり、それを聞いた御所の世話人が、祝詞の中に書き入れたものと思われる。『文政神異記』、『浮世の有様』等に、数々の逸話が書かれているが、これと同様の経緯でそれぞれの筆者に伝わったのではないかと思われる。

立山は前述のように、祭りの作り物のことである。施行が終了した後、数多くの立山が作られたことが、「立山次第書」からわかる。立山は町ごとに作られ、その立山に大関・関脇等のランクが付けられ、十一件については、短い批評も付け加えられている。件数は、大関・関脇・小結が各三件、前頭が二十八件で合計三十七件で、このほか、ランクがない「見立作りもの」というものが九件ある。宇治橋・万金丹屋店・お杉お玉等、伊勢に関係した名前のものが数件ある。参加した町の数は、十九であるが、寺内は参加していない。

宿泊の施行が行われた蔵屋敷の跡に、今は太神宮の社があり、毎年六月十六日に祭が行われている。お年寄りからの聞取りによると、約七十年前まで祭の時に、立山が作られていたということであるが、現在は立山に代わって、小学生の絵が展示されている。なお、奈良県において、今も立山が実施されている所として、御所市名柄の天満宮（七月二十五日）、橿原市北八木の愛宕神社（八月二十三日から二十五日）、北葛城郡広陵町大垣内の専光寺（八月二十四日）がある。

おわりに

大和国御所町に残っていた文書を中心に、文政十三年のおかげ参りについて考察した。この文書によると、大隅・隠岐・壱岐を除く全国の国々から御所に来ている。このことから、この年のおかげ参りは、広い範囲に波及していたといえる。これは、明和期のおかげ参りから六十年目ということが広く意識されていたためと思われる。施行を実施した期間は、閏三月四日から九月八日までで、九千七百二十九人が宿泊している。宿泊者が一番多いのは紀伊で、次に阿波・大和である。この年のおかげ参りは、三月二十日頃に阿波から始まったとされているが、参宮者が阿波から紀伊に渡り、紀伊・大和の人を巻き込んで参宮したことがわかる。

伊勢神宮より東の人が多く来ているが、これらの人たちは、参宮のついでに高野山や西国三十三ヵ所に参詣した、あるいは西国巡礼の途中で施行の噂を聞きつけて御所に来た等が考えられる。また、摂津・河内や播磨以西の人たちも多く来ているが、御所は、これらの国から伊勢へ行く街道の途中ではない。前記と同様の理由が考えられる。さらに、風呂の施行が魅力的であった可能性がある。大和の宿泊者をみると、十津川や吉野といった山間地の人が多く、他国の参宮者を見ても都市部の人は少ない。都市部の人が多かったとする通説には疑問がある。

施行のために町内や近隣の村から、様々な寄進を受けている。それらの寄進をみると、品物の種類が多く、量もまちまちである。米の寄

進では、最高が五石で最低が二合。銭では、最高が千文で最低が一文である。品物においても、醤油一石・割木四駄というものから、漬け物少し・菜少しというように幅が広く、品物の種類も七十以上ある。各自が手近なものを分相応に寄進したことがわかる。このことは、施行が広く住民に支持されていたことの現れである。また、住民の多くが寄進に参加していることから、参宮した人は少ないものと考えられる。

施行が終わった後、太々神楽・立山等の行事をしているが、施行を一種のイベントと考えていた節がある。施行をはじめ全ての行事は、蔵屋敷の近くに住んでいた伊勢講の人たち等が、自主的に行ったもので、町役人は、積極的に関与していない。

おかげ参りに関しては、まだわからないことが多く、また、五百万人近いとされる参宮者の数など、常識となっていることにも、疑問があるように思える。最近は、おかげ参りに関する研究は少ないが、この論考が、おかげ参りについて、見直しの契機になれば幸いである。

注

(1)『日本方言大辞典』尚学図書編　小学館　一九九一

(2)『浮世の有様　巻の二』日本庶民生活史料集成　第十一巻　三一書房　一九七〇

(3)『御蔭参雑記』写本　神宮文庫所蔵、翻刻版『神宮参拝記大成』神宮司庁編　西濃印刷　一九三七

(4)箕居曲在六編『御蔭参宮文政神異記』天保三年刊、翻刻版　同右

(5)『御影正見記』写本　神宮文庫所蔵

(6)「文政十三寅年伊勢御蔭参実録鏡」『日本庶民生活史料集成』第十二巻　世相二　三一書房　一九七〇

(7)『文政十三年庚寅改元天保元年御蔭参り』写本　神宮文庫所蔵

(8)『御蔭群参地名録』写本　神宮文庫所蔵

(9)酒井一「文政十三年おかげ参り施行宿の一考察」今井林太郎先生喜寿記念『国史学論集』一九八八

(10)茨木啓子「文政十三年のお蔭参り・お蔭踊りについて」『ヒストリア』一四一号　一九九三

(11)『橿原市恵比寿神社保管文書』橿原市北八木町所蔵、橿原市立図書館がマイクロフィルムおよびコピー所蔵

(12)「大日本行程絵図」天保十四年御免　慶応元年再刻　板元　京都書林竹原好兵衛

(13)「天保元年　上町おかげ灯籠建立諸入用并寄付記帳」天理図書館所蔵、『大宇陀町史』資料編　一九九二

(14)天保二年「御成箇免定」筆者所蔵

(15)「大坂町奉行　新見伊賀守正路　手日記」東北大学図書館所蔵

(16)『日本暦日原典』第4版　内田正男編　雄山閣出版　一九九四

(17)『奈良井上町中年代記抄』高田十郎編　桑名文星堂　一九四三

(18)『全国方言辞典』東条操編　東京堂出版　一九五一

(19)「諸事記録帳」『新庄町史』資料編　一九八四

(20)天保七年「宗門改帳」筆者所蔵

(21)文化十四年「村名寄高付帳」御所市円照寺所蔵

(22)『本田安次著作集　日本の伝統芸能　第七巻　神楽』錦正社　一九九五

(23)『御蔭群参之図』文政十三年閏三月　田中易慎写　神宮徴古館蔵

【付記】

本稿は、平成十七年度に関西大学大学院文学研究科へ提出した修士論文の一部である。

（関西大学大学院文学研究科・博士後期課程）